

# 読解力評価の方法と反省

— 三重県高等学校一斉テスト共同作成を通じて —

覚 井 靖 夫

## 一 はじめに

第11回三重県高等学校国語一斉テストが、昭和37年9月18日に実施された。私は問題の一部作成と全体会議に参加する機会に恵まれた。未熟な現場経験一年余の実践のまともでもあり、将来への基礎固めのつもりで問題の作成にあたった。評価の集計を終えた今、生徒の解答を検討し、問題作成の過程には気づかぬままに終わった問題作成上の留意点をも求めて、実践の跡を確かに把握し、将来への基礎固めを確かなものにしたと思う。

一斉テストは5問題（1韻文、2かなふり、3書取、4現代文、5古文）から成り立っている。が、ここでは、私が直接関係した4の現代文の問題だけを資料として考察を進めていきたい。

## 二 現代文の問題と解答結果

### a 現代文の問題

つぎの文を読み、あとの間に答えなさい。

（各文の下の数字は、各文の番号である。）

裕福な家庭の一人息子は得てして甘やかされ勝ちだが、インドでは特にそうである①。しかも、その息子が生れて十一年間も一人きりでいたとすると、もう此の定めを免れる術はない②。私には妹が二人出来たが、私より遙かに年が若くまた二人同士も年令が離れている③。こういうわけで私は同じ年頃の遊び仲間とてない、どちらかといえは寂しい幼年期を育ったのである④。幼稚園へも小学校へも入れられなかったので、学校友たちともなかった⑤。私の教育には専らガバナスと個人教師とが当ることになっていた⑥。

（注1ガバナスは女家庭教師。）

私たちの家はいえ、寂しいところとはおおよそかけ離れたもので、ヒンズーの家庭一般にならない、いとこはとも同じ屋根の下に暮していたのだが、いとこたちは皆私よりずっと年長の中学生や大

学生だったので、勉強するにも遊ぶにも、幼な過ぎる私を相手にしてはくれなかった②。こういうわけで、この大家族の中に居りながら、私は置き去りにされた感じで、大抵孤独に空想し、ひとりぼっちの遊戯をするよりほかはなかったのである③。……………

インドの結婚式が貧富を問わず浪費であり、度を外した贅沢であるという点については既に論議が尽されている④。まことにその通りである⑤。単に浪費であるばかりでなく、芸術的とか美的に全然無価値な下卑た装飾は最も見るに耐えない(例外は勿論ある)⑥。實際の責任は中流階級にある⑦。貧者も若しい借金をしてまで法外に金をかける⑧。だからといって一部論者のいうように彼らの貧困が社交上の慣習に基因するとなすのは暴論も甚しい⑨。忘れてならないのは、貧者の生活が恐ろしく沈滞して単調であることである⑩。そこへ時たま来る結婚の祝でお祭騒ぎもし歌も歌う⑪。ちようど生色なき沙漠でオアシスに辿りついたように、ふだんの家事に追われた単調から救われる⑫。平素笑声を出す機会さえ恵まれない彼らから、この慰安さえも奪おうとは残酷ではないか⑬。論なし、浪費は止めるべし、贅沢もほどほどにすべし、(貧者がやりくりして張る見栄に対して何たる大袈裟なまた愚しい言辞だろう)⑭。が、彼らの生活を現在以上に暗黒な、血の気のないものにすることはやめて貰い度い⑮。

中流階級についても同様である⑯。浪費と贅沢とを切り離して、結婚は社交上の大きな結合で、遠くに離れた親戚や旧友が久し振りで再会する⑰。インドは広い国で友人とも一度別れたら再会するのは容易でない⑱。大勢が一緒に会合するとなると難かしくなる⑲。それやこれやで結婚式の祝は人心に投じているのである⑳。唯一の競争相手は、事実既に社交面に於てもいろいろの意味で結婚式を凌駕しつつあるが、政治的の会合、いろいろの会議等である㉑。

問1、私が「寂しい幼年期を育った」理由としてもっとも正しいものを一つ選び、記号で答えなさい。

イ、裕福な小家族の一人息子であって、仲間がいなかったから。

ロ、大家族であったが、ひとりぼっちの遊戯を好んだから。

ハ、孤独な空想家であったから。

ニ、私の二人の妹から、年令的なへだたりがありすぎたから。

ホ、私の二人の妹からも、同じ屋根の下に暮らすいとこはとちからも年令的なへだたりがあつて、同じ年頃の遊び・勉強仲間がいなかったから。

ヘ、上流階級の家庭に育つたので、幼稚園も小学校へも入れられなかったから。

問2、作者の意見として正しいものはどれか。二つ選び、記号で答えなさい。

イ、貧者がまずしいのは結婚式に見栄を張り、法外な金をかけるからだ。

ロ、貧者は、結婚式での浪費と贅沢とを絶対にやめるべきだ。

ハ、貧者は平素恵まれない生活をしているので、結婚式での浪費、贅沢はむしろ彼らの救いとなる。

ニ、結婚式は、浪費と贅沢とが目的である。

ホ、結婚式は浪費と贅沢とを別にして、社交的意味が高い。

ヘ、結婚式だけが、社交の場である。

問3、㉑の文にある「沙漠」(イ)・「オアシス」(ロ)にたとえられたものは何か。そのものを含む文の番号を書きなさい。

問4、㉑の文に「唯一の競争相手」とあるが、何(A)が何(B)

と競争するのか。(A)はイ〜ホの中から選んで記号で答え、(B)は文中にある形のまま書きなさい。

イ、浪費 ロ、貧困 ハ、社交 ニ、結婚式 ホ、贅沢

問5、右の文は、ある書物の一部分である。前文として左の文が引用されているが、これをヒントにして、本文がつぎのイールのどれにあたるか。最も良いと思うものを一つ選び、記号で答えなさい。

「自分自身を描くことは難かしい仕事であり、立派な心掛けである。悪しざまに罵るは自らの心擦り減る業であり、手前味噌は読むものの耳をくすぐる。」

イ、詩歌 ロ、小説 ハ、伝記 ニ、自叙伝 ホ、物語  
ヘ、日記 ト、紀行 チ、随筆 リ、戯曲 ヌ、時評  
ル、文芸評論

問6、右の著者は、どこの国の人か。正しいと思うものを選び、記号で答えなさい。

イ、日本人 ロ、インド人 ハ、イギリス人 ニ、ロシア人  
ホ、アメリカ人 ヘ、フランス人 ト、中国人  
チ、韓国人

問1

問2

問3  イ  ロ

問4 A

問4 A	正解	ニ	79
	誤答	ハロイホヌ	27 20 8 7 1 1
	無記入		21 10
問4 B	上下とも正解		98
	上	正解	103
		誤答	16
		無記入	34
下	正解	102	
	誤答	15	
	無記入	36	
上下とも無記入			33

問5	正解	ニ	77
	誤答	チヌルヘ	33 16 14 3
		無記入	10
		問6	
問6	正解	ロ	110
	誤答	イトハヘホニ	19 10 6 3 2 1
		無記入	2

問5・問6とも正解 57

解答結果

問5

問6

や

B

問4 A・Bとも正解 65

問1	正解	ホ	111
	誤答	ニハイ	23 16 2 1
問2	正解	ハホとも	72
		ハハホ	92
	誤答	ロイヘニ	40
			37 34 2
	無記入	1	
問3	正解	イロとも	103
		14	110
	誤無記入		37
			6
	正誤無記入	15	110
			36
イロとも誤空白		7	
		30	
		6	

### 三 問題共同作成のむずかしさ

この一斉テストは、三重県高等学校国語研究会の名で毎年一回実施されるものである。問題の作成は県下6地区の支部が毎年、持ち廻りであたることになっている。37年度は私の属する牟婁（ムロ）支部が、一斉テスト問題作成委員会を作った。ただし、この支部は、地理的条件も手伝って、問題作成にはあまり積極的ではなく、昨年その任にあたるべきであったものを、台風の災害などもあって回避してきたいきさつがあった。本年もやむをえずひきうけて、やっと腰をあげさせられた状態であった。

牟婁支部は新設高校1校を加えて、37年度から4高校で構成され、国語教科担任教師は18名を数える小支部である。各校から1問題出題することになり（注、1校のみは、書き取）、本校からは現代文の問題を出すことになった。

本校では7名の教師が各人1問題作成し、その上最も妥当と思われるものを選び、それを検討する約束で、6月某日教科会をもった。時あたかも38年度から使用の新教科書および指導書の出廻って

いた時期でもあったので、それら指導書中にある問題を持ちよる姿がみられ、はじめから問題を作らずに集った連中もあった。

私は、私なりに、現場経験1年余の一教師の現実を把握してみたい気持ち強く持っていたので、新しく問題を作って臨んだ。支部で問題作成の話が出た頃から頭を悩ましてきたのだが、簡単には作りえなかった。が、平素、図書館でパラ／＼と頁をめくる習慣の中から偶然に問題が生まれてきた。「ネール自伝1」（全3巻中第1巻、磯野勇三訳）の冒頭がそれである。

グループでは最初、誰にでも親しまれていそうな文章、かかまり国語評価の問題として取り上げられていないものから出題しようとして話し合われていたので、思い付きから作られた私の問題が、一も二もなく取り上げられた。初日は、一、二の意見が出され、後日、コピーにとられたものを検討した。今から思うと、やはり、共同作成に臨むグループの非積極的な態度が、満足な問題を作りえなかった大きな原因でもあり、それはまた、平素の国語教室における現代文読解指導への努力不足を証明しているかのようにも感じられる。

### 四 現代文問題共同作成の過程

① 原文のコピーが配られて意見が出された。

② 本文が長すぎる。

③ 前半か後半かをはぶき、一方をふくらませたらどうか。

④ 設問には難解な語句を避けよう。

これらの意見と交互に、私の態度を述べていった。

④読解力を評価するには、かなりの分量を与えて短時間に読みとらせる必要があると考えている。

◎本文に、ある種の構成をもたせて、その構成を把握する力の有無を通じて読解力の評価をしたいと考えている。

⑤単なる筋の読み取りではなしに、その評価には、文法知識・語句・表現への関心の強さの度合いを診断する態度を含めた。

したがって、本文は意識的に1000字を越えさせたこと。本文を3部分より構成し、その1部分を設問の中においたこと(問5)。本文の2部分、前半と後半とは表面的には直接関係のない箇所を並べ、前半を過去形表現の部分、後半を現在形表現の部分としたことなどを説明し了解していただいた。

さらに、本文の内容を問うばかりでなく、設問それ自体をじっくり考えさせるものとして、問4をそれらしい設問に作ってほしい気持ちと述べて、後日の会議まで検討していただくことになった。

### 五、現代文問題共同作成の過程Ⅰ

#### ——設問修正、プラス・マイナス——

ひきつゞく会議では、本文の長短論・本文の構成などは問題とならず、問4を修正の中心に据えた。まず、問4についての解答を出していただいたところ、2通りの解答にわかれた。このことは、設問の方法・説明文などの不明瞭さを指摘していただくプラスの結果となった。設問の説明文に自信がないのでこのような方法がとられたのであるが、不明瞭な設問でこうした方法は軽率なことであった。身近かの仲間にも語力を試みられるのが不愉快だという意識の方が強く働いて、快い雰囲気ではなかった。もっと、フランクな形

で、出題者の意図するものが無理なく伝わるか否かを問う方法をとるべきであったと、討議の過程を反省している。

問4の設問の原形は、つぎのものであった。

A、②の文に「唯一の競争相手」とあるがその主体は何か、一つ選べ。

イ浪費、ロ貧困、ハ社交、ニ結婚式、ホ贅沢

B、同じく、「唯一の競争相手」を文中にある形のまま書け。

(注、解答欄に枠を設けた)

Aは「ハ」(社交)を正解として要求するものであった。設問中の「主体」という語を考えさせ、「結婚式」における「社交」の面と「政治的の会合」や「いろいろの会議等」における「社交」の面とが競争するという本文の意味を把握させたかかったのである。しかし、不要な感情も混じったためか、「主体」という意味は考えていただけず、実施された設問のようになってしまった。これでは、あまりにも表面的なものであり、本文の内容を問うにしては滑稽にすぎるような形ではないかと、今でも心が落ちつかない。まして、本問題の受験者中検討の対象にとりあげた「B」名について、

正解「ニ」(結婚式) 79件

誤答「ハ」(社交) 27件

の結果が出てくると、もっと、この問題に力を注いでおけばよかったと冷汗を覚える。

やはり、「何(A)が、何(B)と何(C)とにおいて競争するのか……」とでもして、真剣に文の読解に力を注いでいる生徒を数え上げてみたかった。もちろん、実施されたテストが、全日制、定時制、普通科、職業・家庭科、1・2・3年それぞれ共通という巾

広い生徒を対象にしているから、むりに、極端に程度を下げたものであると考えば、それなりに意味はあるのかもしれない。が、この設問修正にあたっては、そういう意識を改めて抱いたかどうかは疑問である。読解力の評価をするものである以上、もう一歩進めて設問の方法に力を注ぐべきであったと思う。この設問だけは、何か心淋しいものを抱かせられた共同作成であった。

## 六 問題共同作成のむずかしさⅡ

各校単位の共同作成においても同じむずかしさがあつたわけだが、これが地区の全体会議になるといっそうむずかしい問題がでてくる。

各校代表2名の教師(予定7名、実際は6名)が、疑義ある点の有無、設問形式などの検討・統一をする程度のことと予想されて、7月中に3回の会議をもった。

現代文では、選択法の選択文の長短がめだつので妥当な範囲で手を加えた。問4の問題も考えていたどころとしたが、意見が出ず、結局担当校で修正したそのままになった。卒直な態度で意見交換ができないことは全体会議でのむずかしさであるらしい。若手を育てる意識を持つとか国語教育推進の立場に立つとかして、遠慮や対抗意識をなくしていきたいものである。一方、全体会議がむずかしいだけ、あるいは、スムーズな形で展開されるために、問題作成の中心者はずっと真剣に、問題の検討をし、設問方法・評価内容とその意味などについて徹底的に考えておかねばならない。自己の国語教育者としての力を伸ばすことに努力しなければならぬ。

某校担当の韻文の問題はズイブンと叩かれ、全体会議で原案が破

棄され、新しい問題の作成を急がねばならなかった。後日、あらためて新しい問題が出されたが、その原形が比較的多くの生徒に利用されている参考書の中にみられた。設問内容に多少、手が加えられてはいたが、認められるものではなかった。結局、全体会議を経ないまま、別な問題がプリントされる結果となった。

問題作成の過程には、はがゆい思いを残すことが多すぎた。が、結局、出題者の自信の無さ、つまり、平素の国語教育実践の不徹底さに原因が求められることと、修正することによってより良い問題を作り出す努力と意欲の無さ、共同作業による積極的な問題作成意欲の無さ、けなすことにはやって生み出す苦痛を味わぬ無責任さなどに原因を探ることができよう。これらには、若手を養成していく努力もなく、自らを成長させていこうとせぬ停滞した姿——現場の国語教育のまづい姿が認められる。

平常の小テスト、中間、期末のテストが、平素の学習指導にあつた指導者の自己評価として扱えられていないという現実の姿の現われではなからうか。学生時代には予想もされなかった姿だけに、現場の多忙さの中で陥っていく恐ろしい姿に肝をつぶす思いである。

## 七 解答例による問題の再検討

テスト実施の各校において採点されたものを本校において集計した。課程・学年・男女別による集計であるが、自校の成績が参加校中何位に位置するかとか、全般に第2学年の成績がかんばしくないとかを知る程度で、集計の結果にはほとんどと見るべき意味はなかった。

問題の再検討をするにあたって、受験者の中からつぎの153名の生徒とその答案を取りあげた。これらの生徒は、36年度に「国語乙」を指導し、ひきつゞき37年度に「国語甲」を指導している2年普通科の153名である。普通科の持ち上がり担任として、教科担任としてこれらの生徒の学習態度・性行を具体的に把握してき、今後の指導にも役立てられると考えたのが、対象にとりあげた理由である。

イ、問1の設問について

問1は本文前半、第1・2段落の内容把握を問うものである。本文前半そのものは後半第3・4段落の内容につながる幼年期の思索的態度に触れた部分である。理由を表わす説明文「イ」「ヘ」には、十二分に正しい説明文も入れず、全然まちがった説明文も入れなかった。比較的、必要にしてかつ十分な説明文に近いもの一つを選ばせる方法をとった。(以下の注、111/153) 正解数/誤答数/生徒数  
正解(ホ)の111/153の正解数は、出題者の意図を十分に汲みうる設問と判断してよいと思う。たゞし、誤答として、(ニ)が38/153、(ハ)が16/153と比較的多く出てきた。

(ニ)の23/153は、④の文で「こういうわけで……」という「寂しい幼年期を育った」直接の理由付けの表現があり、そのみによって判断した跡が見られる。そこには、第2段落を参考にするゆとりがない。インド風習をも読みとって「全体の中の部分」を把握していこうとする訓練の身につけていない姿がある。説解力を診断されようとするのではなくて、受験者の生活を中心に判断している幼稚さがある。(ハ)の16/153もまた、第2段落の読み落しがある。

たゞ面白いことは、正解者以外の生徒の発言の中には「……いとこはとこ……」が「従兄弟再従兄弟」として認識されなかったという声も聞かれたということである。このような誤答の理由も指摘しておきたい。

ロ、問2の設問について。

問2は本文後半のみに限った問である。「インドの結婚式」に対する筆者の思想と「一部論者」の思想とが錯綜している表現に着目して、全体の中から、思想の主流と挿入された思想との判別を要求したものである。対立する説明文を並べ、正しいものを選ばせる方法をとったのは、問1と同じ傾向の設問に流れないためである。

設問を作るにあたっては、対立意見の判別でもあるし、問1よりも問2の方により多くの正解数ができるものと予想した。が、結果は

正解(ホ) 100/153 正解(ハ) 92/153

誤答(ロ) 40/153 誤答(イ) 37/153

誤答(ク) 34/153……………

であった。

共同作成の際に、説明文の長短にバランスを持たせるように配慮することが話し合われた。内容を考えないで、長短の差に生徒独特の勘を働かせて解答するというのである。適当な範囲で手を加えたが、必ずしもその配慮の必要はないということではなからうか。

たゞし、誤答として、「ロ」、「イ」、「ヘ」の数が多いのを見ると、特に「ロ」、「イ」には、主流となる思想と挿入されている思想との判別を考えたかどうかを疑う気持ちを強く覚える。良い加減な所で妥協しているような、あるいは、無鉄砲な勘で記入した態度がみられる。

3 割以上にもなるこのような誤答を見せつけられると、「段落分け」・「部分と全体との関係把握」・「説み返し」などの操作をしながら「ジツクリ読む」態度を身につけることが、生徒にとって、かなりむずかしいものであることに十分留意する必要があると思われる。説解指導が地に着いた方法で行なわれるように努力する必要があると感じられる。

事実、教科書使用の教室でも、一頁二頁と目を前後に向けさせて、全体から部分を、関連する部分から問題の部分を理解させていくようにすると、目玉をクリ／＼して口をトガラシている連中が実に多い。また、未知の説解方法には全然ついて来ようとしない生徒も多いわけで、指導技術においても考えていかねばならない点は実に多い。

#### ハ、問4の問題について

問4の設問中、Aについては先に触れた通りいろいろ考えた。ここでは、「本文の筋の把握」・「本文の構成把握」・「文法・語句の操作・理解」などの力によって本文を中心に説解力の診断が行なわれることのほかに、特に、設問それ自体を考えさせることの中においても、もっとく設問方法を開拓して行く必要があるのではないかという気持ちだけを述べて、Bの解答例について触れていきたい。

——設問それ自体をよく理解しなければ解けない形式とか、本文の理解によらなければ明瞭にならない設問とかいうものを開拓していないのではないか——

Bの問は、「競争相手」の何であるかを把握することと、さらにそれを正しく書写する能力を見ることによって、より確実に説解力

を評価しようとしたものである。(後に誤答例を列挙しておく。)

解答欄に枠を設けた場合であるが、特につぎの2点があげられる。

(イ)、枠を埋めることが精一杯というもの、そこまで達しないもの——「ままとまりの思想を示すに足りない解答」。

(ロ)、内容を把握したが、忠実に書写しえなかったもの——「一字一句を正しく押える態度に欠けている解答。ここには、生徒の説解力の基本的な弱点の一つが明らかに示されている。

これらの解答をした生徒には、軽卒な行動の者も多いけれども、単に、軽卒な性格の者の解答として片づけるだけでなく、説解の基本的な態度の欠除という診断に立って考えて行きたいものである。つぎに、生徒の説解上の弱点を示す誤答例をあげる。

(□は空白・×は誤記を示す)

- (イ) 「贅沢である点」 「贅富をとわず浪費」 「結婚式□□□□」  
「社交面に於いても」 「浪費とぜい沢」 「貧者の生活の単語」  
「社交面に於て」 「結婚式、政治的会合」 「離れた親戚□□」  
「□□□□□□□□」 「社交上の慣習」 「□□□□□□□□」  
「社交面に於て」 「政治的の会合□□□□」 「旧友□□□□□□」  
「遠くに離れた親戚」 「離れた親戚□□」 「旧友が久し振りで」  
「貧困が社交上」 「事実既に社交面に」 「浪費と贅沢□□」  
「いろいろの会議等」 「政治的の会合」 「結婚式を凌駕する」  
(ロ) 「政治面の会合」 「いろいろの会議等」 「政治的な会合」  
「いろいろの会議□□」 「政治的な会合□□」 「いろいろの会議等」  
「政治上の会合」 「いろいろの会議等」 「政治的の会合」  
「いろいろの会議□□」 「政治的の会合」 「いろいろの会議」  
「政治的の会合」 「会議等□□□□□□」 「政治的の会合」

「色々の会議である」「政治的の会合」「いろいろの会議ら」

## 二、問5・問6の設問について

問5は本文構成3部分のうち1部分を含めた問である。生徒は、本文とこの問の形式によって、ジャンルを問うものであることを判断し、本文を読み返すであろう。さらに、大方の生徒は、本文前半の過去形表現に対する後半の現在形表現であることに気づくであろう。その上、前半の第一人称表現と問5中の「前文」の「自分自身を描く……」の部分により、後半の表現にこだわりつゝも、「自叙伝」を正解と判断するであろう。

なお、後半の表現・内容にこだわっている態度、あるいはそれによって他を解答した者などは、伝記・自叙伝などの読書体験のない者が少ない者と考えることができるかと思う。

問5において自叙伝であることを把握すれば、本文の筆者がインド人であることは自動的に解ってくることで、問6は問5の解答がより正確なものか否かを確認するために付加した問である。出題者の意図は以上のような点におかれた。

ところが、問5の正解数が77/153に対して、問6の正解数は110/153という結果が出た。これらの正解数から判断すると、本文が「自叙伝」であることを押えて問6に「インド人」と解答した生徒は77名以下で、33名というものはその解答に確信を持たないものと考えられることができる。人称と本文全体との関連を押える正道を通った過程が認められないのは淋しいことである。両者共正解であるものを数えるとわずかに77/153であるから、確信のある解答がいかに

少ないかがよくわかる。本文を正しく読み、「自叙伝」であることを文法的にも語句的にも正確に押えて解答できる生徒は実に少ないのである。

ところで問5・問6のいずれか一方を問とすることで「自叙伝」としての文章把握——読解力を評価したとする場合もあるかもしれない。しかし、右のような結果は、今考えたような評価の方法には大きな危険が含まれていることを教えている。観点を変えて設問する必要がある。

つぎに、一斉テスト実施後、問5について受けた批判を取りあげ検討してみたい。

問5は設問・前文・項目と並んでいるが、「イ」〜「ル」までの項目には不必要なものが並び過ぎているから縮少した方がよろしいというのである。

不必要な項目の並んでいるのは事実である。が、雑然と並んだ項目の中から不必要なものを整理したうえ、考えられそうな項目群について、本文および他の設問をヒントにしてより正しい思考をさせること——整理能力を試みるものとして、このような姿があってもわるくないと思う。

たとえば、正解の「自叙伝」が21/153に対して、誤答である「随筆」が32/153と正解の半数に接近し、順次、「時評」16/153、「文芸評論」14/153、「日記」3/153、無記入10/153のように受験者の半数が誤答・無記入で終わっている結果を見ると、本文の構成を把握せず、文法・語句・前文など留意すべき点を無視している生徒が、何を「随筆」と考え、何を「日記」・「時評」・「文芸評論」と考えているか、あるいは、いかに読書範囲の征服に餓えているかという実態を知らされる訳である。

「時評」・「文芸評論」などの項目は、大方、上記のような注意を怠った生徒が、文明批評などと錯覚して答えたものであらうと推測される。が、このように、整理が必要と批判される「項目並べ」が、実は、かくされた生徒の実態を明らかにする働きをしているのである。問6の解答例とあわせ考えてみても、けっして無意味なものでないことが解かる。

単に得点数のみを取りあげて生徒に順列をつけようとする立場からは、多々批判も出てくるであらう設問にも、一つ／＼の設問に対する解答例を関連づけて取りあげていけば、生徒の国語能力の長所欠点をより正確に把握しうる点が多く見られるものである。

評価問題を作成する過程に自己の全力を注ぎ、実施後の処理を綿密に検討していく過程は、単に、生徒の国語能力を評価しうるだけではなくて、自己の国語教育実践者としての実力と方法とを評価し、伸ばしていくことになると考える。それは結局、生徒に、より正しい国語能力をつけていくことになる。

国語教育実践者は、自己の行動によって、国語教育の前進に努めなければならぬと思う。

38・1・10

(前、三重県尾鷲高等学校教諭)  
(現、三重県津高等学校教諭)